

# 『掃除は世界を救う？』

芹田 アン

9695文字

あらすじ

明子の息子が通うクラスで「学級崩壊」が起きているという。ハウスクリーニング関係の仕事をする明子は、担任の先生より協力を求められ、保護者会である提案をする。はたして掃除で子供たちの世界は救えるのか…

「はい、では自分の植木鉢から種を収穫して、自分の袋へ入れて来て下さい」  
先生の言葉が終わるか、終わらないか、といううちに子供たちがわっと教室からベランダへ向かう。

(なるほど…一年生の教室が1階にあるのはこんな意味もあったのか…)

私は変な所で感心してしまった。

「見て！もう百個くらいある！」

「ちょっと押さないでよ」

「あ！ハサミムシ！」

子供達が楽しそうに朝顔の種の収穫をしている。今日は1年生になった息子の二学期最初の参観日である。夏休みに各家庭に持ち帰って、観察の宿題をした後、また学校へと持ち帰った朝顔の植木鉢は、その個性が様々に出ていて実に面白い。

窓越しに、種を収穫する子供たちのきらきらと輝く瞳に、思わず涙が込み上げてくる。子供が生まれてからというもの、ちょっとしたことで涙が込み上げてきてしまう。子供の成長していく姿が、なんだか宝物のように思えてしまうのは、どこの母親もそうなのだろうか。他の保護者も、みんな身を乗り出して窓からベランダを覗き込んでいる。

種を植えて、水を与え、芽を出し、葉を広げた後に花が開く。その花も終わり、こぼれ落ちる種をまた来年の新一年生にプレゼントする為に、子供たちは育てて来た。大人になると、当たり前な事ばかりになって行くが、初めて触れる時はこんなにも目を輝かすのだ。そんな子供たちの中で、あつという間に教室に戻って来た子がいた。ふとその子の植木鉢を見ると、他の子に比べてあまり大きく成長しておらず、種の数も少ないように見えた。

(あ、あの子が純一くんか…)

私はしばらく目で追っていたが、息子の幸太に呼ばれてまた窓の外へ目を向ける。子供たちがきらきらと輝く反面、仕事柄か…窓の汚れが少し…いや、かなり気になってしまう。

(ま、一年生じゃ窓掃除は難しいだろうし、担任の先生も妊娠中だと言っていたしな…それに、それどころではないか…)

種の収穫を終えた子供たちが、それぞれの席へ戻って来た。ここから、種の観察日記を書くようだ。私は、まだざわざわと落ち着かない子供たちを必死になだめて声掛けをしている先生に目を遣りながら、先日配られた学級通信の内容を思い出していた。

《1学期の終り頃から、何度か授業が成り立たないことがあり、懸命に指導してまいりましたが、二学期に入ってから度も度々起こり、現在は教頭先生や補助教員を配置し、改善に向けて取り組んでおります。保護者の皆様のご協力をお願いしたく、ぜひ学級懇談会にご出席いただければと思います》

これはおそらくSOSだ。こんなことを学級通信に書く先生は、きっと珍しいのではない

だろうか。学級懇談会なんて出席する保護者は年度初めだけで、仕事をしている親が多い現代では、2回目以降は出席した保護者は5、6人。なんて、よく聞く話である。かくいう私も、上の息子も、次男の幸太にも学校生活で特に気になる事もなく、学級懇談会に参加したのは最初の一度だけであった。授業参観も終わりまで見ることなく、中抜けして来た仕事へと戻っていた。上の息子に至っては、ここ数年学級懇談会には出席していない。

「はい、お口は閉じて、種の観察日記を書いてください」

担任の先生の何度目かの声掛けも虚しく、子供たち数人の雑談の声が止まない。

「ほら！口閉じて！さっさと手を動かさない！」

こんな風に、いっそ私が怒鳴りたい衝動に駆られたその時だ。

「おしっこしてきまーす」

ふざけた様に言って立ち上がった純一くんが、突然教室から出て行った。

「俺も！俺も！」

とあとから二人が付いて出る。それを驚きもせずに、後ろにいた補助教員らしき先生が追いかけて教室から出て行った。

(なるほど…)

驚いた保護者のざわつきとは反対に、今度は教室が静まり返る。先生は情けないような、ほっとした様な複雑な表情を浮かべたまま、

「お手洗いにいきたい時は、休み時間に済ませてくださいね。どうしても授業中に行きたくなった時は、きちんと手をあげて教えてください」

残った子供たちもいつものことなのか、数人が小さく返事をしただけで、みんな種の観察日記をしっかりと書いていた。

(なるほど、これのことか)

私は目の当たりにして、ようやく幸太の話していたことを理解した。

「本日はお忙しい中お集まり下さいまして、本当にありがとうございます」

最初にそう挨拶をした担任の先生は、すでに泣きだしそうな顔をしている。確か、最初の学級懇談会で35歳と言っていたはずだ。小柄でおとなしそうなタイプに見えたが、時折見せる鋭い目つきになんとか頼もしさを感じた。一年生はもう何回も担任していると言っていたので、特に不安も感じていなかった。

「では、初めに先ほどお配りした学級通信をご覧いただきながら…」

先生がそこまで話した時に、一人の保護者が声をあげた。

「すみません」

迫力のある声に、保護者も先生も一斉にそちらを向いた。残念ながら、わたしは知らない方だ。いや、このクラスで顔見知りなのは2人だけなので、そもそも声でわかる。その保護者の顔は、明らかに怪訝な顔をしており、私も思わず小さくなる。先生の返事を待

たずに、その保護者は話を続ける。

「先ほどの授業拝見させていただきました。そして、先日の学級通信も。話すべきことは他にあるのではないのでしょうか」

大きくはっきりとした声で、真っ直ぐに先生を見つめて放ったその言葉は、確かに他の保護者も思っていたことだ。その為に、今日はクラスのほぼ全員の保護者が出席していたのだ。先生は、少し呼吸を落ち着けてから、静かにこう切り出した。

「まずは、私の指導が至らないことで、保護者の皆様にはご迷惑をおかけしてしまい、本当に申し訳ありません」

先生は座ったままの状態ではあったものの、膝におでこが着くほど深く頭を下げている。顔をあげたその目から涙が出ているのでは…と私は不安になるほど長く、誠実な沈黙。

「先生、顔をあげてください」

見かねたのか、クラス委員長の林さんが声を掛けた。幸太とは、幼稚園から一緒に仲の良い保護者の一人である。先生は、ゆっくりと顔をあげて、保護者の顔をしっかりと見つめ返している。その目は、涙などは浮かべておらず、前を向いた意志のある強い目だった。

(ああ、この先生は諦めてなどいない)

それがはっきりと伝わる表情に、ほっとしたのは私だけではないだろう。先生は手にした数枚の資料に時折目を遣りながら、クラスの現状を淡々と話し始めた。

先生は徹底して、生徒の個人名は避けて説明していた。最初は、落ち着かない生徒が数人おり、初めての学校生活という事もあり大らかな気持ちで指導してきたこと。しかし、少しずつ他の生徒へと伝染し始めて、クラス全体の私語が止まなかったり、立ち歩く生徒が出て来てしまったこと。それが何度か続き、とうとう教室の外へと度々飛び出す生徒が出て来てしまった。そうすると、その生徒を先生が追いかけてしまうと授業が困難になり、学年主任や他の教員とも相談して、現在は一時的な措置として手の空いて居る教員が交代で補助教員として授業についている。確かに、先程目の当たりにした授業風景は概ねこんな感じであった。

重たい沈黙がしばし教室を包む。私は先ほどの授業の様子を思い返しながらか、窓の方へと目を遣る。先程気になった窓の汚れが、少し離れたここから見ても気になる。ふと足元へと目を遣ると、明らかに鉛筆の芯を引きずって出来た様な黒い汚れが、あちこちにある。

(…今すぐ掃除したいな)

目に付くのは、ハウスクリーニングの仕事をしている為か。普段はそんなに気になる性格ではないのだが、どうしても目に付いてしまうと気になって仕方がない。そんなことを考えていると、どきりとする様な言葉が聞こえてきた。

「これは、学級崩壊ということでしょうか」

先程の保護者である。やや感情的になっていることが、微かな声の震えから読み取れた。他の保護者は沈黙を守ったまま、しかしその目はほとんどが先生を見つめている。《学級崩壊》何とも嫌な響きである。度々耳にはしていたが、まさか自分の目の前でその言葉が投げ掛けられるとは、夢にも思ってみなかつた。現実として、何処でも起こり得る事だとは理解していたつもりが、どこか他人事だったのだと身につまされる。

「たしかに…」

先生が言いかけた言葉にまたどきりとする。

「学級崩壊の定義が何か、といわれると私にはつきりとは申し上げられませんが、このクラスの現状の様な些細な積み重ねが、いずれあつという間に取り返しのつかないことへ繋がるとは思っています」

先生は言葉を選びながら、慎重に話している。

「暴力やいじめなどはあつたのでしょうか」

また別の保護者が、心臓に悪い言葉を先生に投げ掛ける。正直、私は幸太から毎日のように学校の話しを聞いていたので、それらが無いことは知っていた。というよりも、ついこの間まで幼稚園や保育園でのんびり楽しく過ごして来た子供たちが、小学校へ入ったからといって、急に45分間しかも一日中きちんと授業を受ける事なんてすぐ出来るはずはない。という、大らかな見方をしていたので、幸太から話を聞いていても、まさか自分の息子のクラスが《学級崩壊》を起こしかけているなんて思いもよらなかつた。

「暴力やいじめなどは確認しておりません」

先生はきっぱりと言った。

「今後、どういう対応を学校側はとるつもりなのでしょうか」

ざわついた教室内が、また沈黙に包まれる。その保護者の言い方には、明らかな学校への、いや先生への嫌悪を感じ取れて、私は何だかたまらない気分になった。そんな保護者からの発言は想定内だったのか、先生は少し黙ってからまたゆっくりと話し始めた。

「今後、学校側としては、これ以上授業が遅れるようであれば、教育委員会から支援員を配置してもらったり、問題のある生徒を個別に対応していく…というのが一般的ですが…」

そこまで言う前から先生は少し下を向き、何か決心したのかまた顔をあげて続けた。

「私は、そこまではする前に何とか改善したいと思っています。確かに、数人から伝染してしまい現状に至っておりますが、子供たちもまだ学校生活を初めて数か月です。行事の際はきちんとまとまりを見せましたし、些細な喧嘩などはもちろんありますが、基本的に仲の良いクラスだと思っています。今後、これ以上悪化させない為にも、より一層子供たちに寄り添い、精一杯指導して行きますので、どうか保護者の皆様にもご協力いただけないでしょうか」

そう力強く言った先生の表情は、諦めない強い意志を持った目を保護者へ誠実に向けている。

(胎教にも悪いだろうな)

私は、なんだか心苦しいような、少し悲しい気持ちになる。

「協力というのは具体的に、私たちは何をすればいいのでしょうか」

保護者の一人が、申し訳なさそうに発言した。

その《具体的》という言葉に、私はほぼ反射的に口を開いてしまっていた。

「子供たちと一緒に教室のお掃除をしませんか」

「明子さん、さすがだね」

恭子さんが、コーヒーのカップを持ち上げながらくすくすと笑っている。幸太のクラス委員の委員長をしている林さんである。幸太の幼稚園の時からのお付き合いなので、気心が知れている。私は、手元の《親子行事のお知らせ》の下書きを眺めながら、掃除の手順を手書きで走り書きしたコピー用紙を林さんに渡す。

「どうしても気になっちゃったのよね」

私は笑いながら溜息を吐いた。教室の汚れが、子供たちにどう影響するかなんてはつきりとした確証はなかったけど、親子でコミュニケーションをとりながら、自分たちの教室を掃除することは、なんとなく素敵なことに思えた。

「それにしても、あの言葉は響いたわ」

恭子さんは思い出したようにまた、くすくすと笑う。

「窓掃除を終えたあとの達成感、あの見違えた窓の爽快感が尋常じゃないことは、少なくとも普段家事をしている皆さんはわかりますよね」

私は興奮気味に、窓掃除について語ってしまったのだ。ぼかんとしている保護者もいれば、うんうんと激しく同意してくれている保護者もいる。先生の隣で、笑いを堪えている恭子さんの姿が目に入り、私は我に返った。

「一年生ですと高い所の窓掃除はまだ難しいでしょうし、高い所と仕上げの洗剤は保護者がやるようにして、子供たちは濡らした新聞紙でも十分綺麗になります。あとは床の鉛筆跡をきれいにするだけでも教室は見違えると思います。」

それから先生の方を向き直り、

「そしてどちらも妊婦にはキツイ作業だと、ここに居る皆さんがよく分かると思います。子供たちがお世話になっている教室をきれいにする保護者の姿を子供たちに見せるだけでも、十分意味があるような気がするのですが…」

先生の表情がみるみる崩れていた。泣かせたかったわけではない。私は、しまった…と思い、恭子さんの方を見た。助け舟を促す。恭子さんは、「すみません」と初めに言うてから、「クラス委員長の林と申します」と軽く頭を下げた。さすがである。保護者も《クラス委員長》という言葉に反応し、どの保護者もしっかりとそちらを見据えている。

「実は幸太くんのお母さんは、ハウスクリーニング関係のお仕事をしています。近く予定されてる親子行事の際に企画をして、正式に依頼すれば簡単な掃除の仕方を教えて頂いたり、洗剤の手配なども出来ます。子供たちの為に出来る《具体的》なことのひとつとして、やってみても良いのではないかと、私も今のお話から思いました」  
そこまで言ってもらえれば、もう決定したようなものである。他に《具体的》な案が出ることはなく、後日プリントで詳細はお知らせするという形でこの日の長い懇談会は幕を閉じたのだ。

「それにしても、先生には悪いことをしてしまった」

私はぼつりと言った。あの後、クラス委員の保護者数名と、私だけが教室に残り、親子行事の進め方を簡単に打ち合わせをすることになった。私は、先生を責めたくてあんなことを言った訳ではない、と誤解を解きたかった。同じ母親として、胎教に悪いことはひとつでも減らしてあげたかったのだ。

「幸太くんのお母さん、先程はありがとうございました」

先生の方が先に頭を下げてしまった。

「ちょっと先生、止めてください。私、なんだか言葉足らずで先生を傷付けてしまったのではないかと…申し訳ありませんでした」

私も頭を下げた。二人で顔をあげたあと、先生は私の顔を見てこう言った。

「私自身が妊娠していることを責められてもおかしくはないのに…」

「は！」

思わず口に出してしまった。

「おかしいですよ！なぜ妊娠を責められなくてはならないのですか。先生が今ご指導下さっている子供たちは、みんなそうやって生まれてきたのですよ。むしろ、妊娠をしていながら担任を続けて下さっていることに、本当に感謝しています」

何故、働く母に世間はこんなにも冷たいのか。私自身、嫌というほど味わって来たので、その辛さはよく分かる。何よりも、妊娠した母親自身が、お腹の子に申し訳ないと思う程、働く母親たちは自分に厳しくなってしまうのだ。

「堂々とお腹のお子さんを育ててください」

私はふざけた様にお腹を突き出して見せて、そう先生に言って笑いかけた。先生も、懇談会が始まってから初めてにこやかに微笑んでくれた。目にはいっぱい涙を浮かべながら。

「はい、では先程説明した通り、窓の係りと床の係りに分かれて、お掃除を始めてください」

私は一通り説明を終えて、ほっとしてから教室を見渡す。親子行事は通常の授業時間を二時間分確保してあり、他のクラスも同時に行われる。各クラスでお楽しみ会を行ったり、体操や制作活動など、主にクラス委員を中心に企画されているが、もちろん親子

行事で清掃活動というのは初の試みだそうだ。《なるべく親子でコミュニケーションをとりながら、楽しく清掃活動に参加してください》と言った手前、私も全体を見守りつつ、親子でなるべく交流を図らなければ息子に申し訳ない。当の幸太はさっさと新聞を濡らし、固く搾り、窓の方へと向かっていた。

(さすが我が息子)

《学級崩壊》の噂は瞬く間に広がり、他校に子供を通わせている友人からも連絡が来た。

「大丈夫？」とか、「どうするの？」とか、口に出すのは皆不安や好奇心ばかりで、もちろん具体的な解決策を提案してくれる人は一人もいなかった。今回だって、たまたま懇談会で「具体的に保護者は何をすればよいか」という質問が出なければ、私は何かする気になっていただろうか。きっかけは、些細な言葉や偶然の思いつきでも、こうして小学校と深く関わられたことに私自身が何処か救われていたのだ。

「純一くんの保護者は不参加かもしれない」

恭子さんは直前までそう言っていた。私も気になっていたことだ。彼と保育園が一緒だったという保護者も、彼の母親を行事で一度も見かけたことがないと言っていた。家庭の事情があるらしく、運動会などは祖母が来ていたそうだ。全てが純一くんのせいだとは思わないが、やはり問題の根底に在るのは間違いがない。入学以降、最初の授業参観やフリー参観、各行事でも彼の落ち着かない態度や、何処か挑発的で投げやりな行動が、どうしても目につく。それでも、他のお友達にも先生にも、よく笑い甘えているような素振りも見せていた。徐々にそれらの行動に、周りの子供たちが引っ張られてしまう様子も容易に想像がついた。きっと先生も、今まで色々な方法で向き合ってきたはずだ。しかし、学校生活の基盤は家庭にあり、家庭は子供たちにとっては非常に大きな存在意味を持つ。その部分とうまく連携が取れなければ、思うように改善されないこともあるだろう。

(純一くんは、淋しいのかな)

同じ母親としても、昔は子供だった大人としても、どうしても胸が痛む。

「先生もね、なんとか今日参加していただけないか、って何度も純一くんのお母さんに連絡したそうよ」

恭子さんもきっと私と同じ気持ちを先生に話したのだろう。そう話す顔は、とても悲しげだった。

「ねえ、なんで洗剤つかわないの」

純一くんが大きな声で聞いてきた。乱暴にバケツに雑巾を投げ入れて、ぐるぐると片手でつまんでかき回している。

「実はね…」

私が説明をしようとしたその時だった。

「こら！バケツがひっくり返るでしょ。やめなさい純一」



大きな声が教室の入り口の方から響く。教室が一瞬静まり返り、視線が集まる。

「ママ…なんで」

純一くんがぼかんとしている。

「あ、大きな声を出してすみません。純一の母です。遅くなってすみませんでした」

少し恥ずかしそうな、不機嫌そうな顔は、純一くんによく似ていた。

各々軽く会釈をしたりしながら不自然に目を逸らし、それぞれの作業へ戻る。掃除の説明をするべきかと、純一君のお母さんへ歩み寄ると、一足先に出迎えた先生と純一くんが話している。純一君は照れくさそうに頬を赤く染めしながら、もじもじとぎこちなく動いている。先生は泣き出すのでは、と思うくらいの笑顔である。

(本当によかった)

つられてこちらの口元も緩んでしまった。

「さて、全員揃いましたので、再度簡単にご説明します」

私は教室全体に声を掛けた。自然と声が大きくなり、自分でも恥ずかしいくらい張り切っているのがわかる。残りの工程を説明してから、私はちらっと純一くんの方へ視線を向けた。歩き回る事も、ふざけることもなく、恥ずかしそうにお母さんの隣へ座っている。

「先ほど純一くんから《なぜ洗剤を使わないのか》という質問をうけました。実は、皆さんが先程から雑巾を洗ったり、新聞紙を濡らしたりしているバケツのお水には、薄く中性洗剤が混ぜてあります。中性洗剤というのは、いわゆる台所洗剤ですね。お皿洗いなんかには普段は使っている、どこのご家庭にもある洗剤です」

小さく驚きの声があがり、私は得意になって続けた。

「新聞紙だけでも簡単な汚れはきれいに落とせます。それは、新聞に印刷されているインクの油分が汚れを落としたり、艶を出してくれたりするのです」

私は子供たちが静かに話を聞いてくれていることに驚き、もう少しだけ聞いてもらうことにした。

「ではクイズです」

子供たちが《クイズ》と聞きざわつく。私は笑顔で続ける。

「皆さんの身の回りの物でも、新聞紙の様にお掃除が出来るものが沢山あります。それはなんでしょう」

子供たちは思い思いに口にしたり、

「わかんない」「ヒントちょうだい」と叫んでいる。

「では、おうちの人に聞いてみてください。きっと、色々な答えが出てくると思います。どうしてもおうちの人に分からなかった時は、私の所に聞きに来てくださいね。では、仕上げまであと少しです。皆さん、よろしくお祈いします」

残りの作業は実に賑やかに進んだ。先程の答えを親子で話したり、保護者同士でも掃除という共通の話題で盛り上がっている。私は、掃除の仕上がり以前に、こんな風景を

思い描いていたのかもしれない。

(掃除は世界を救う、かも)

私はにやにやしながら、幸太の元へ近づいた。

「はい、幸太くんクイズの正解をどうぞ」

私はいたずらっぽく笑って、幸太の頭へ手を乗せた。

「お茶、お酢、みかん、れもん、消しゴム、歯磨き粉。あ、お母さんのストッキングとか、サランラップもだ」

幸太は真面目な顔で次々に答える。

「幸太君すごい！」

近くで聞いていたお友達や保護者が驚いて褒めてくれたことが嬉しかったようで、恥ずかしそうにごもごもと小さく言った。

「よくお母さんと掃除をしているからね」

私は嬉しくなって、幸太の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。元々掃除は好きであったが、子供たちには自分の身の回りのことは、なるべく自分で出来るようになって欲しかったので、生活の中で子供たちにも出来ることはどんどんやらせてきた。特に、自分の頑張りが即座に見て取れる掃除は、幼い子供でも自分で拭いた所があからさまに綺麗になれば、その達成感や爽快感をきちんと感じる事ができる。何となく、家の中がごちゃごちゃと散らかったままだったり、窓がいつまでも汚れて曇ったままだと、心にも何か良くない物が溜まっていきそうな気がしていたのだ。

周りを見渡すと、窓を挟んで顔をくつつける様にして拭き掃除をしている親子や、床の鉛筆跡をしゃがんで擦っていて、頭をぶつけてしまっている親子、机に書かれた娘の落書きを手が触れながら向かい合って消す親子、その間を掃除の手伝いをしながら笑顔で話しかけている先生が見える。教室は笑い声と笑顔に包まれていた。

いよいよ最後の仕上げに、私は窓拭き用のスプレーを窓へと吹きかける。子供たちにかかったり、吸い込んだりしたらまずいかな…と少し窓から離れた所へ子供たちを集めた。仕上げの拭きあげ作業を他の保護者に手伝ってもらい一気に行う。

「うわ！きれい！」

「びかびか！」

子供たちからも、保護者からも歓声の声があがった。

(そうそう、これこれ)

私はピカピカに光る窓と子供たちの笑顔を見て、思わず温かい涙が込み上げてきた。今日の親子行事で掃除が出来たことに心から満足していた。

親子行事の清掃活動が、クラスにどんな影響を与えたのかは分からないが、後日配布された学級通信には、少しずつクラスが落ち着いて来たことや、床や机の鉛筆跡を

自分たちできれいにしたことで、普段から気を付けて汚さないようにしようという変化が子供たちに見られたそう。幸太からも、「最近、純一くんが教室から出ていかなくなった」と聞いていたので、さらに安心した。

どんなにきれいに業務用のワックスで仕上げても、大事なことは普段からきれいな状態を維持しようと思う、小さな心がけだと私は思う。自分の周りをきれいに保とうと気を配ることと、人に対する心遣いはどこか似ている。丁寧な掃除は、絶対にその仕上がりや達成感を裏切らない。

(やはり、掃除は世界を救う！かもしれない)

私は、次はどんな方法で子供たちと掃除をしようか…と考えながら、今日は小さなオフィスのワックス掛けの依頼だったが、モップを滑らせる手に以前よりも愛情を込めていた。

(了)